

# 聾学校の障害認識の評価

## －自立活動の評価表からみた障害認識の評価－

横尾 俊

### 1. はじめに

聾学校では幼児児童生徒が自分の障害について適切な理解の促進を図るために、自立活動の枠内に障害認識の領域を設ける動きが見られる。国立特殊教育総合研究所の特殊教育障害実践データベースで「障害認識」に関する実践を検索してみると、近年その数が増加しており、聾学校でのこのカリキュラムが徐々に浸透して来ていることが推測できる（小田 2000）。これらは国際障害分類（ICF）の記述の変更にも影響を与えたノーマライゼーションの理念や個人を尊重する考え方の浸透により、障害を負の属性ではなくその人の個性としてとらえるようになってきたことや、聴覚障害者自身が自分自身の障害について語る機会が増えてきていることが影響を与えていると考えることができる。

ここでは、「障害認識」カリキュラムが社会の変化などをその背景として聾学校の教育現場に導入されていることを踏まえ、現在の聾学校における障害認識のカリキュラムについての評価方法を分析しながら、このカリキュラムの位置付けや聾学校での障害者観について考察し、今後のこの分野への期待や課題について考えたい。

### 2. 聾学校の障害認識カリキュラム

聾学校において障害認識に関連する内容は主に自立活動の中で扱われている。自立活動は「個々の生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。」<sup>4)</sup>と述べられているように、それ自体が障害認識関連のカリキュラムといえる。近年ではさらに一歩進めて、聾学校の中で自立活動に「障害認識」という独立した領域を設け、聴覚障害幼児児童生徒が自分自身の障害に対して理解を深めていくことを目的とした取り組みも見られるようになってきた。しかし本稿では、「障害認識」という独立した領域のみではなく、自立活動の中での障害の扱われ方を検討することで、聾学校の障害認識カリキュラムについて考えてみたい。具体的には、聾学校の障害認識カリキュラムを考える上で、自立活動の教材や、個別指導計画表の評価欄を通して障害に対する評価方法について検討していく。本稿では、平成13年度に国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部聾教育研究室で実施した全国調査で収集した自立活動の指導に用いている個別指導計画表26校分を対象に、評価項目と評価方法について検討した。個別指導計画表は自立活動で行う活動についてのねらいや目標、また目標に対しての評価が述べられているため、「障害認識」カリキュラムの評価を検討する上で非常に有用であると考えられる。

まずはじめに、資料の概要を述べる。聾学校26校の資料を学部別に分けると以下のよ

うな構成となっている。

表1 学部別自立活動の評価票の数

幼稚部	11
小学部	12
中学部	15
高等部	7
専攻科	3

自立活動の内容について学部別に分類すると以下ようになった。  
まずは幼稚部についてあげてみると。

表2 幼稚部の自立活動内容

内容	学校数
聴覚活用	6
発音・発語	6
語彙	6
コミュニケーション	3
補聴器	3

この他には身辺自立、障害受容、障害認識、手話、キュードサイン、がそれぞれ2校、社会性、書き言葉、指文字、生活習慣などの内容がそれぞれ1校において行われている。

次に小学部の自立活動についてである。

表3 小学部の自立活動内容

発音・発語	5
補聴器の管理	4
障害認識	3
耳の仕組み	2
常識	2
読話	2

この他には 福祉、進路、日本語、手話、音の聞き取り、語彙などの内容がそれぞれ1校において行われている。

次に中学部の自立活動についての内容を以下に示す。

表4 中学部の自立活動内容

補聴器の管理	10
発音・発語	7
常識	6
福祉制度	5
情報機器	5
手話	5
書き言葉	5
耳の仕組み	4
障害認識	4
コミュニケーション	3
進路	3
読話	3
音の弁別	3
マナー	2

この他には、指文字、ろう者の歴史、福祉機器、性教育などの内容が各1校で行われている。

次に高等部・専攻科の自立活動については以下の通りである。

表5 高等部・専攻科の自立活動内容

手話	8
常識	8
耳の仕組み	7
福祉制度	7
補聴器の管理	5
マナー	3
進路	3
発音・発語	3
コミュニケーション	3
ろう文化	3
障害認識	2
筆談	2

この他には、福祉機器、読話、情報機器、口話などの内容が各1校で行われている。

この結果を見ていくと、幼稚部・小学部では発音・発語や語彙など訓練的な内容が主だが、学年があがるにつれて常識やマナー手話など、社会参加に向けて必要な知識や振る舞いなどについての内容が多くなっていく傾向にあるようである。また、幼稚部・小学部よりも中学部、高等部になるにしたがって、その内容の種類が多様になり、項目が増えていく傾向にある。社会参加を見据えて教育課程を組めば必然的に内容は多様になり、週2単

位の自立活動の中で様々な活動が行わなわれている。

これらの資料のうち、「障害認識」という領域を設けているものは11あった。これらの評価表の中で取り上げられる障害認識カリキュラム内容を KJ 法を用いて内容をカテゴリー化すると8つに分類できる(表6)。

表6 障害認識カリキュラム内容のカテゴリー

1.聴覚障害についての理解	耳の構造や聞こえの仕組み、難聴の種類や原因など自身自身の聴覚障害を理解するための知識を扱っている。
2. 補聴器	1.の聴覚障害についての理解を図る内容と近い内容だが、補聴器の構造や操作の仕方を学び、実生活で役に立つ知識を扱う。
3. 身体障害者手帳や 福祉制度	聴覚障害に関する福祉制度などを学習することで、福祉の利用の仕方を学ぶ
4. 将来について	将来について仕事や生活などについて、話し合いなどを通じてイメージを持たせる
5. 情報保障	手話通訳やノートテークなど、情報保障の種類や利用の仕方について取り上げる。
6. ふるまい	聞こえる人とのやりとりで困ったときにどう対処するかなど、主にコミュニケーション場面で遭遇する事例を取り上げてそれに対する対処の仕方について取り上げる。
7.聴覚障害者の歴史	ろうあ運動などについて取り上げ、欠格条項などについても生徒同士で考えさせる。
8 コミュニケーション	手話を中心に聴覚障害者のコミュニケーションについて生徒同士で考えさせる。

これらの領域のうち、1～3はワークシートの記入や講義形式の授業を用いており、知識を重視したものがある。その取り組みの中では生徒に内省を要求しないことが推測できるが、4～7については、教師の用意した題材を元に話し合いをしながら、生徒それぞれが考えながら進めるという方法がとられる。今回は資料のサンプル数がそれほど多くなかったので統計的な分析はおこなっていないが、集められた資料は1～3の知識的な内容を扱

っている取り組みが多く、4～8の内容を扱っている取り組みは少ない。前者よりも後者は進め方や評価の仕方が難しかったり、マニュアル化が困難であるために、取り組み例が少ないということが推測できる。

このように今回扱った資料のうち「障害認識」として扱われている領域の要素を抜き出してみると、中学部・高等部の自立活動の内容（表4、表5）と似た項目となり、聴覚障害児童・生徒の社会参加に関連する領域を広くカバーする結果となる。しかしながら、各実践においては単発的な領域を扱っているものがほとんどであり、すべての領域を広範囲に行っている学校は少ない。このことは、これらのカリキュラムが開発途上にあるということもあるが、自立活動の中では他にも扱わなければならない内容が多く、障害認識関連の内容にあてる時間が少ないということも影響していると思われる。

「障害認識」の領域に複数の下位領域を設定しているカリキュラムも若干であるが見られる。内容の例としては、障害認識の領域の中に「聞こえないことへの理解」と「福祉制度の理解・活用」の二つの下位領域をもうける学校と、「自分の中でのこと」、「まわりとの関係でのこと」の二つの下位領域をもうける学校があった。その中で様々な内容を取り扱っている。このほかにも、今回扱った資料からみられるものではないが、いくつかの聾学校が障害認識について複数の領域を設定して実践を行っているようである。

今回の資料の中には、幼稚部から高等部の系統性に配慮したカリキュラムがいくつか見られた。このようなカリキュラムを作成するためには学部内の各学年間や各学部間の連携が必要となり、その準備により多くの時間や労力が必要となるが、各年齢段階で行うべき内容について担当教員がそれぞれ意見を出しあい系統性を持たせることでカリキュラムの内容が充実するという利点がある。また、カリキュラムを実施する上でも、低学年では高学年までを見通した上で取り組むことができるし、高学年ではこれまでの積み重ねを意識することができるという利点もある。

「障害認識」を自立活動の枠内で行う限り、時間数の制限が足枷となることが予想できるが、領域の複数化と系統性の構築は内容を充実させる為に必要なプロセスであると筆者は考える。

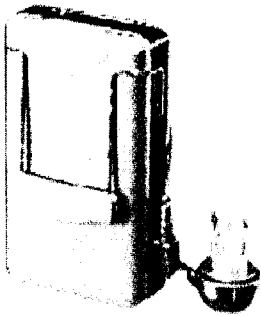
### 3. 障害認識の評価の形式

前節では障害認識カリキュラムの特徴を述べたが、この節ではこれらの障害認識カリキュラムに対して行われている評価についての特徴を述べてみたい。

まず、評価の記述スタイルから見てみたい。記述スタイルとしては、ワークシート形式、チェックリスト形式、自由記述形式の3つのスタイルに分類できる。

ワークシート形式（図1）は、穴埋め問題式や問答形式の回答に対して正答か誤答かを評価するものである。主に知識を対象とした内容で用いられるもので、前節の1～3の内容で用いられる。この形式では学習し終わった結果を保存していくことで、児童生徒自身の資料集となるという利点があるだろう。

1.下の図に対応する語句を（ ）内に記入してください。



( ) 補聴器



( ) 補聴器



( ) 補聴器

2.補聴器は（ ）で意見書を作成してもらい、地方自治体の（ ）  
で（ ）の発行を受け購入する。

図1 ワークシート形式の例

チェックリスト形式（図2）は、児童生徒の障害認識について「できている」「できていない」の二つの基準で評価がされるものである。この場合、評価結果の記述は非常に容易だが、障害認識ができているかどうかの判断を何をもって行うかを定めることに難しさがあり、適用する内容については議論する必要があるだろう。

- 1.  障害認識ができている
  - 障害を積極的なものとして理解している。
  - 障害を仕方のないものとして受け入れている。

図2 チェックリスト形式の例

自由記述形式は、児童生徒の障害認識について担当する教員の視点で評価するという形式である。さらにこの形式を見てみると、すべてが担当者に任せられ、活動にたいして大まかに分類された欄に記入していく形式（図3）のものと、段階別に到達目標が細分化されている形式のもの（図4）に分類できる。後者に関しては発達的な基準が示してあり、評価の視点としてある一定の基準があるということができよう。

聴覚学習	
障害認識	

図3 自由記述形式で記入基準のない例

聴覚学習	
障害認識	

幼稚部段階	
障害認識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 補聴器をしている人としていない人がいることに気づく</li> <li>・ 身振り・手話・指文字を使う</li> <li>・ 音の存在に気づく</li> </ul>

図4 自由記述形式で記入基準のある例

これらの日本のカリキュラムと比較する意味で、アメリカの Washington,DC にある聾者の大学 Gallaudet 大学の附属聾学校 KDES (Kendal Demonstration Elementary School) で行われている Deaf Studies カリキュラムの評価の仕方を見てみたい。

KDES の Deaf Studies カリキュラムは6つの領域：Identity (ID)、American Deaf Culture (ADC)、American Sign Language (ASL)、Communication (C)、History (H)、Social Change (SC) を備え、それぞれについて各学年で行う活動が具体的に示してある。図5はその活動をしめたシートの一例である。SUBJECTIVES はこの単元の大まかな目的を示し、ACTIVITIES は具体的な活動を示している。

KDES のカリキュラムの評価方法は非常にシンプルである。評価は図6のような表を用いている。この表は各領域とその系統性をマトリックスにしたものであり、それぞれのマスはそれぞれの単元に対応している。評価方法はその単元について一部学習したものは、表中の□に  と記入し、全部終えたものは  のようにチェックする。また、生徒の様子などを極簡単にメモするという評価方法である。したがって、活動によって児童生徒がどう変わったかや、どう障害認識しているかを記入する方式ではなく、あくまでも準備した活動を行ったかどうかその評価の観点になる。類似した内容を扱う学習活動でも、その成果に対する考え方の違いがあることがわかる。

*Describe social life and social values of the Deaf community.*

**SUBJECTIVES:**

- A. Identify local Deaf clubs and explain their purpose.
- B. Describe reasons why sporting events are popular in the Deaf community.
- C. Identify other ways deaf people socialize (bridge clubs, political organizations, school clubs, etc.).
- D. Identify and describe social values/norms in the Deaf community.
- E. Describe how social life has changed in the Deaf community and give reasons for the changes (TTY, captioned films and videotapes, relay service, etc.).

**ACTIVITIES:**

- 1. Find out the names and addresses of local Deaf clubs in your community. Write a letter to a local deaf club to find out the purpose of that club.
- 2. Take a survey of deaf people to find out if they go to a Deaf club, belong to a Deaf bowling league, or a Deaf bridge club, etc.
- 3. Attend a sporting event that is popular with the Deaf community.
- 4. Identify sports activities popular with men and women in the Deaf community.
- 5. Ask an older deaf adult to talk about how social life has changed over time in the Deaf community and/or schools for deaf children. Discuss how deaf adults socialize with colleagues at work.

図5 KDES の Deaf Studies カリキュラムの例



# Cumulative Progress Chart for Deaf Studies

Student's Name \_\_\_\_\_

	Yearly Level	Identity	American Deaf Culture	American Sign Language	Communication	History	Social Change
PRIMARY	1	ID 01 <input type="checkbox"/>	ADC 01 <input type="checkbox"/>	ASL 01 <input type="checkbox"/>	C 01 <input type="checkbox"/>	H 01 <input type="checkbox"/>	SC 01 <input type="checkbox"/>
	2	ID 02 <input type="checkbox"/>	ADC 02 <input type="checkbox"/>	ASL 02 <input type="checkbox"/>	C 02 <input type="checkbox"/>	H 02 <input type="checkbox"/>	SC 02 <input type="checkbox"/>
	3	ID 03 <input type="checkbox"/>	ADC 03 <input type="checkbox"/> ADC 04 <input type="checkbox"/>	ASL 03 <input type="checkbox"/>	C 03 <input type="checkbox"/>	H 03 <input type="checkbox"/> H 04 <input type="checkbox"/>	SC 03 <input type="checkbox"/>
INTERMEDIATE	4	ID 04 <input type="checkbox"/>	ADC 05 <input type="checkbox"/> ADC 06 <input type="checkbox"/>	ASL 04 <input type="checkbox"/> ASL 05 <input type="checkbox"/>	C 04 <input type="checkbox"/>	H 05 <input type="checkbox"/>	SC 04 <input type="checkbox"/>
	5	ID 05 <input type="checkbox"/>	ADC 07 <input type="checkbox"/>	ASL 06 <input type="checkbox"/>	C 05 <input type="checkbox"/>	H 06 <input type="checkbox"/>	SC 05 <input type="checkbox"/>
	6	ID 06 <input type="checkbox"/>	ADC 08 <input type="checkbox"/>	ASL 07 <input type="checkbox"/>	C 06 <input type="checkbox"/>	H 07 <input type="checkbox"/> H 08 <input type="checkbox"/>	SC 06 <input type="checkbox"/> SC 07 <input type="checkbox"/>
MIDDLE SCHOOL	7	ID 07 <input type="checkbox"/>	ADC 09 <input type="checkbox"/> ADC 10 <input type="checkbox"/>	ASL 08 <input type="checkbox"/> ASL 09 <input type="checkbox"/>	C 07 <input type="checkbox"/>	H 09 <input type="checkbox"/> H 10 <input type="checkbox"/>	SC 08 <input type="checkbox"/> SC 09 <input type="checkbox"/>
	8	ID 08 <input type="checkbox"/>	ADC 11 <input type="checkbox"/> ADC 12 <input type="checkbox"/>	ASL 10 <input type="checkbox"/>	C 08 <input type="checkbox"/> C 09 <input type="checkbox"/>	H 11 <input type="checkbox"/> H 12 <input type="checkbox"/>	SC 10 <input type="checkbox"/> SC 11 <input type="checkbox"/> SC 12 <input type="checkbox"/>
	9	ID 09 <input type="checkbox"/> ID 10 <input type="checkbox"/>	ADC 13 <input type="checkbox"/> ADC 14 <input type="checkbox"/> ADC 15 <input type="checkbox"/>	ASL 11 <input type="checkbox"/> ASL 12 <input type="checkbox"/>	C 10 <input type="checkbox"/> C 11 <input type="checkbox"/>	H 13 <input type="checkbox"/>	SC 13 <input type="checkbox"/> SC 14 <input type="checkbox"/> SC 15 <input type="checkbox"/>

図 6 KDES の Deaf Students の評価表

## 4. 評価することの課題

教育評価の観点としては、絶対評価や相対評価が用いられることが多い。これらは到達水準やある集団の中での相対的な成績などの基準をもとに児童生徒の現在の段階を評価するということになる。教育は子どもに対して様々な良い影響を与えることを目的としているので、生徒自身の今現在の状態に対しての基準を持たなければ評価を行うことが難しいことは自明のことであり、これは教育的な評価方法ということが出来るだろう。

しかしながら、児童生徒自身の障害認識を評価する場合には、今までの考え方だけでは困難が伴うだろう。それは、児童生徒自信の障害についての考え方は様々であり、またそれは自己理解の一部でもあるので、第三者が明確な否定や肯定はできないものであるからである。

平成13年に豊教育研究室が行った全国調査「聴覚障害児の障害認識に関する調査」の中には障害認識の評価について問う設問（自由記述）を設けたが、障害認識の評価は難しいと述べる回答が多く、実践を行っている教師の間でもこの課題は認識されていると考えられる。そこには、評価すべき項目に代表されるような評価内容を適切に構造化した評価法の困難さと、障害認識という「心の内側」に深く関わる価値関連事項を評価する事への二つの側面があると考えられる。

森井<sup>3)</sup>は、児童生徒に考えさせるだけでなく、教師自身も一緒に考えていくことが重要

だと述べ、ある価値基準にこだわらずお互いの関係性の中で障害認識をとらえていくことを重視すべきであると述べている。また上農 1)も障害認識に取り組む上では児童生徒の障害認識を変えるだけでなく、教師自ら変わっていく必要があることを説いている。教師の障害認識に関する考え方の変化を評価する具体的な方法は今回集めた資料の中からは見ることはできなかった。しかしながら、試行的に児童生徒の考え方やその変化に対して教師自身がどう考えたのかという内省を含めた記録を行いながら取り組みを進めていくことも一つの方法と考える。

評価の視点が絶えず変わっていく、あるいは変えていくべきという視点は、我々がこれまで経験してこなかったことである。しかしながら、児童生徒のみならずそれに関わる周囲の障害認識の評価も考えていくことは今後の課題といえるだろう。

## 6. 終わりに

本稿では障害認識の取り組みの中でいくつかの評価方法とその課題点について考えた。

近年の実践の数の増加をみれば、障害認識カリキュラムは聾学校で現在進行形で構築されつつある分野ということがいえる。評価の方法は今までの考え方を土台に徐々に変化していくことが考えられ今後の実践の中での構造化が期待される。

### 【引用文献】

- 1) 上濃正剛 2003 たった一人のクレオール ポット出版
- 2) 小田侯朗 横尾俊 2000 聴覚障害児の障害認識に関する研究 国立特殊教育総合研究所 研究紀要,27,35-45.
- 3) 森井結美 2003 早期教育における障害認識と保護者支援 国立特殊教育総合研究所一般研究報告書「聴覚障害児の障害認識と社会参加に関する研究-様々な連携と評価を中心に-」
- 4) 文部科学省 1999 盲学校、聾学校及び養護学校小学部・中学部学習指導要領
- 5) Kendall Demonstration Elementary School 1993 Deaf Studies Curriculum Guide Pre-College Programs Gallaudet University.